講衆に関する研究

川勝政太郎

一、序説

本論集第四号（昭和四五・一一）に、私は「中世における石塔造立階級の研究」を書いた。わが国中世の仏教考古学的遺品として数多く遺存する石塔が、主として社会の上級乃至中級の階層によって造立され、庶民の参加はきわめて少なかったこと、それらの造立階層というのは、武士層、名主層であったことを、各地の遺物とその銘文を中心にして考察したのである。

その造立者は中世においてはたいがい個人であったが、また何人かが結集して「一結衆」の名称によって造立したものもあることに触れておいた。今回の小文においては、そのような多人数の共同体として知られる「講衆」を中心にして、その周辺を追究してみたいと思う。

講衆という言葉は、仏教辞典や一般辞書に出ているが、「講義を聞く大衆、講会に集る人衆」、ひいては「無尽講や頼母子講など金銭の融通を目的とする講の人々」といった解説を見るのが普通である。前者は講が仏教の講義を意味した原初的なものから出ており、後者はごく近世の仏教からはなれた俗社会的なものの説明である。

あたかもその中間、時代でいえば中世から近世にかけて、仏教的作善としての石塔などの造立者グループの講衆というものが、全国各地に活動したのである。それはわが国の歴史、仏教史、信仰史の上で無視することができないのであるが、残念ながら従来これを深く追究した論考が見あたらない。

講衆のもとは講にある。桜井徳太郎博士『講集団成立過程の研究』（昭和三七・三）の第三篇「宗教的講の成立と地域社会への滲透」に論じられるところも、原初的な仏教の講を説いたあと、近世の民俗的な講に中心が移って、私たちのいう中世の講衆については触れるところはな

い。論文の目的がちがうからである。それでは一般の仏教史の書物に講衆が取り上げられているかというと、たとえば法蔵館刊『日本仏教史』全三巻（昭和四二・一～九）のような近ごろの概説書においても、古代的な講と近世的な講について述べるのみで、中世の講衆は取り上げられない。これは逆にいえば、中世の講についての論考がなかったわけではない。寡聞ではあるが、その二、三をあげておく。服部清道博士『板碑概説』（昭和八・九）第二篇第四章第四節の「板碑に現はれたる講に就いて」において述べられたものがあるが、板碑に限られているので、中世全体には筆が及んでいない。佐々木利三氏が『京都古銘聚記』（昭和一六・三）の付載論文「古銘文とその発願者について」において、講及び講衆について述べられたのは、最も詳しい論考であった。山城所在の中世から近世初期にわたる古銘遺物の中から、講衆や一結衆の例を約三〇取り上げて、講衆の活動に注目されたが、書物の性質上全国的な規模で論じられなかった。近来では千々和実教授の『武蔵国板碑集録』二（昭和四三・四）の中の「七、衆団造立板碑」に触れられるところがあるが、割合簡単である。

以上のような状況であるから、私としては四十年余各地の遺品を探訪した間に、講衆関係の資料もかなり集まっているので、それを整理して、主として中世の講衆とその伝統についての研究を展開してみたいというのが、この論文の目的である。

二、古代的な講

仏教の講そのものについては、わが国では平安時代に上流社会で行われた講や、寺院において公開的に行われた講のあることは、すでによく知られているが、本論理解の便宜のため一応簡単に述べておきたい。

奈良時代すでに行われていた最勝会・仁王会・法華会は、それぞれ金光明最勝王経・仁王般若経・法華経を読誦し、これを講義する国家的な大法会であり、平安時代に盛行した法華八講は法華経八巻を朝と夕と各二巻ずつとして四日間に八巻を講読する法会である。経を読み講じ供養することが主体である。こうした講会は国家的寺院またはこれに近い大きい寺で行われたが、その風が貴族に及び、その住宅の仏堂や、ある建物を臨時に道場として、貴族の私的法会としての講が行われるようにもなった。

たとえば鳥羽上皇の女院高陽院（かやのいん）泰子が、仁平三年（一一五三）に行った十斎の中の、阿弥陀講は、平信範の日記『兵範記』六月十五日条によ

ると、次のような有様であった。

高陽院の御所は今の堀川西洞院の間、竹屋町椹木町の間の二町四方を占めていたが、その中の御堂において阿弥陀講が営まれたのである。この御堂は九体の阿弥陀像をまつる九体堂で、中尊は丈六像であった。中尊の前に仏鉢に白飯を盛って供え、九体の像それぞれに香、花、燈明を供えた。藤原時代らしくはなやかに堂内の設備をととのえ、六人の僧の座の前の机に法華経一部八巻と開経（般若心経）結経（阿弥陀経）各一巻、合わせて十巻の他、阿弥陀講の式文が安置された。

殿上人、上達部が多く参列し、午后二時に権少僧都相源など六人の僧が着座すると、院司の顕親朝臣が挨拶し、ついで阿弥陀講がはじまる。相源を導師として、法華経開結十巻が供養され、阿弥陀講の讃文を書いた式文が説かれ、これで講は終了し、導師は座を下り、ついで僧六人に布施を下された。経を講義するというよりは、仏や経を供養することに重点が移っている。美しい行事であった。

公開的な寺での講の例としては、『大鏡』の物語の舞台に使われて有名な、雲林院の菩提講がある。これは今の紫野大徳寺のある辺りに、平安時代にあった雲林院で、毎年五月に人々を集め、菩提を求めるために法華経を講説した法会である。講師は大衆にもわかるような説教をしたのであろう。法華経講説とはいうが、基本には極楽浄土信仰がある。この時代にはまた人々を集めて弥陀来迎の有様を見せる法会の迎講（こうこう）もあった。

本来、講はこのような法会であった。それが次第に内容的に変化を起し、念仏講などの講や講衆を生じるのである。

三、結衆と講衆

講というものが経典講説という意味からはなれて、仏教的な集り、作善などに参加するグループの意味のものになった時に、そのメンバーである人々を講衆とよぶようになるのである。烏合の衆ではなくて、所属の講がはっきりしているわけである。このような講や講衆はいつ、どのような環境から生じたのであろうか。

まずこうした講や講衆は貴族的なものでないところに特色がある。もちろん貴族の参加を拒むものではないにしても、庶民または庶民に近い中級の階層に結びつくものである。その意味から近年来仏教民俗資料の宝庫として注目を集めている奈良市元興寺極楽坊の仏教民俗の中に、講

や講衆の発生の一つの場があることが想像されるし、そうした資料が存するのである。

極楽坊の現本堂は鎌倉時代中期の寛元二年（一二四四）の再建であるが、内部に保存されている古い柱に、田地寄進文が刻まれていることが知られている。その一は鎌倉時代はじめの貞応元年（一二二二）に、百日講の御仏供料として田地を寄進した文で、この百日講は、百日にわたって法華経を講じた講である。しかもその信仰の基本には極楽往生の信仰があったもので、同じく寛元二年（一二四四）の本堂棟札の文の中に「往生講衆一百余人」とあるように、極楽浄土に生れたいという信仰の講衆が百余人、本堂再建に協力しているのである。この寺ではこのような百日講、往生講といった講を母胎とする信者のメンバー、すなわち講衆が育って行ったものと見られる。

しかし一般に講衆という文字の用いられる例は、鎌倉時代のはじめにはまだ少い。仏教的作善に関して、多数の人が参加するという記し方が多い。多数者参加の古い例には、聖武天皇が東大寺大仏建立にあたって、広く知識（寄進や奉仕）を求め、行基を起用して各階層の協力を期待したことは有名である。

愛知県蒲郡市勝善寺の鐘は、もと三河国薬勝寺の旧鐘で、寛喜二年（一二三〇）に「大衆ならびに結縁衆」によって造立されたと銘文にある。これは梵鐘造立にあたって、大勢の人々が費用を出すことに協力したのであるが、いわば事業が存在して、これに縁を結ぶ人たちが多くできたのである。

群馬県甘楽郡甘楽町小川の多井戸板碑は、仁治三年（一二四二）造立の巨大な自然石板碑であるが、銘文中に「合力已上三十余人」とある。これも同様に板碑造立にあたって三十余人の人たちが協力したのであって、特定の結衆がすでにあったのとは意味がちがう。

埼玉県北埼玉郡騎西町上崎の竜興寺にある文永八年（一二七一）の板碑には「右志者、毎月廿四日結衆、奉造立青石卒都婆……衆生也」とあり、この石塔造立の志趣が法界衆生の菩提をとむらうためのものであり、造立者は「毎月廿四日を期日とする結衆」であることを示している。新平三入道以下十二人ばかりの名がつらねてあるが、藤五郎、藤三、三平太などのような名が多いのは、この土地の中級の百姓たちの結衆らしく思われる。この板碑の上部は失われて本尊の梵字が見られないが、二十四日は古くから地蔵菩薩の結縁日となっているので、この結衆は地蔵信仰をもって結ばれているのである。地蔵菩薩は六道に迷う亡者を極楽浄土に導くと説かれるから、窮極は浄土信仰につながるものである。この廿四日結衆では、先に結衆という母胎ができ、この結衆の作善として板碑が造立されたわけである。上方欠損しているが、本来二メートルに

近い大きい板碑である。一人の財力でもこれほどのものが、当時多く造立されているが、その中にあって、この十余人が個人としては力がなくても、結衆の力によってこの作善を行った点に、むしろ私たちは感銘を深くするのである。

群馬県邑楽郡千代田村赤岩の光恩寺板碑は、同じく文永八年に造立されたもので、大檀郡阿闍梨幸海をはじめとして、藤原吉宣、藤原兼吉、紀真正など十九名の交名があり、「結衆敬白」としているので、これらの人々もグループを結び、その作善としての板碑造立である。この人々の名は姓名を明記したしかつめらしいもので、武士層または名主層の人たちの結衆であろう。板碑面には地蔵立像をあらわすが、その上の梵字は欠失している。おそらく阿弥陀の種字であったのであろう。これらの人も富裕な豪族ではなく、中級の階層であったのであろう。結衆は一結衆とも称した。

仏像の造立にあたっても同様であって、財力のある一個人の造立や、多くの結縁者をつのっての造立があり、また講衆による造立もあるが、講衆造立の例は割合少いようである。京都市上京区堀川寺之内上る興聖寺に現存する木造地蔵菩薩坐像は、古くからこの土地にあった地蔵堂の本尊であった。像背の墨書銘によると、建治二年（一二七六）三月九日の造立で、「愛宕護山地蔵講衆□□十四人」とある。京都の西北にそびえる愛宕山には愛宕権現の信仰が古くからあり、その本地仏を将軍地蔵とする。この仏像は愛宕山の地蔵信仰による講衆が当時この地にあり、その信仰の本尊として造立されたのである。地蔵講衆の名の見られる古い一例である。

和歌山県高野山金剛峰寺の鐘(注1)は、弘安三年（一二八〇）造立の河内国高安郡（現在八尾市）教興寺旧鐘であるが、「一結講衆同心合力」して奉鋳したとし、施主美乃正吉、僧教善など二十三人の交名がある。大勧進浄縁の名があるので、この勧進僧によって誘われた人々が梵鐘奉鋳のために結衆したのである。一結講衆は一結衆と同じで、一般にはこの頃から一結衆の文字がしばしば見られるようになる。

（注1）以下鐘銘については、坪井良平氏『日本古鐘銘集成』（角川書店）の恩恵を受けた。

先に二十四日結衆の例を見たが、これに類した結衆は各地にあったようである。兵庫県加西市吸谷の慈眼寺（観音堂）の庭に建っている五重石塔は、基礎に刻まれた銘文によると、弘安六年（一二八三）七月十四日に「毎月十四日念仏結衆等」による造立である。また埼玉県比企郡小川町腰越の能満寺墓地にある弘安九年（一二八六）の板碑は、上半を失って本尊の梵字は不明であるが、「為毎月十五日一結衆□現世安穏後生菩提也、四十人」とある。十五日は阿弥陀如来の結縁日であるから、十五日一結衆の四十人は極楽浄土信仰の結衆であり、十四日念仏結衆は前

日に法事を営む念仏信仰の結衆と考えられる。

鎌倉時代中頃には講衆と記すものが段々増して来る。京都府亀岡市宮前町宮川の山腹に建つ金輪寺にある正応五年（一二九二）の層塔は、上方部分を失うが、基礎に「願主宮河講衆」と刻まれている。これだけでその人たちの名も、人数もわからぬが、山麓の宮川集落の人々の講のあったことが知られる。

神奈川県箱根山の俗称曽我兄弟・虎御前の塔という三基の五輪塔の向って右端の一基は、地輪の背面に「地蔵講結縁衆」が永仁三年（一二九五）に造立したことを刻む。ここ二子山麓の精進池付近に、その頃地蔵講の人たちが、地蔵信仰の五輪塔や、地蔵磨崖仏を数々造立したのである。

地蔵講に対して、阿弥陀信仰・念仏信仰の講も多いことはいうまでもないが、奈良県桜井市多武峰の談山神社にある永仁六年（一二九八）の十三重石塔は「六八願衆」によって造立された。六八は掛算で四十八であり、阿弥陀如来の衆生を救済せんとする四十八願に因るもので、阿弥陀講衆ということである。こういうひねった名称を用いるのは珍しい。

奈良県御所（ごせ）市西寺田の勝福寺に遺存する永仁七年（一二九九）の五輪塔の地輪には、「奉造立之願主比丘乗遍、一結念仏衆等」とある。勝福寺は昔かなりの大きい寺であり、その寺の乗遍が願主となり、この寺を中心に結ばれていた念仏講衆が造立に参加したのである。

大阪府守口市佐太中町七丁目の来迎寺は、古い佐太集落の中心となった大きい寺の風格を今に伝えるが、池庭の築山の上に建つ十三重石塔は、嘉元二年（一三〇四）に「当寺講衆四十余人」の造立したものであることを、四方仏の脇に刻んでいる。これも寺を中心に結ばれた講衆の例である。

茨城県那珂郡那賀町戸崎の蓮光寺の旧鐘銘は、延慶二年（一三〇九）のもので、「願主十八日講衆等」とある。十八日は観音の結縁日であるから、これは観音講と考えてよい。

山形県上山市前丸森板碑は応長元年（一三一一）の造立で、本尊の梵字は金剛界大日如来の「バン」であるが、「四十八日念仏結衆等二十人面々各々敬白」とある。阿弥陀の四十八願にならって四十八日念仏の結衆が二十人の人々で結ばれ、この供養の板碑が造立されたのである。密教の大日を本尊としているのは、密教系の念仏講というべきであろう。

三重県阿山郡阿山町上友田の来迎寺宝塔は、以前近くの阿弥陀寺にあったのを、阿弥陀寺を来迎寺に合併したので、近年移転したものである。応長二年（一三一二）造立で、基礎の刻銘に「阿弥陀寺念仏講衆、現世安穏後生善所」とあり、寺に所属した念仏講の例である。

寺には所属しないが、寺と密接な関係を示すものもある。滋賀県大津市葛川坊町の明王院の正和元年（一三一二）の宝篋印塔には、「四村念仏講衆等敬白、常住頼玄」の刻銘がある。これは昔の坊村ほか付近の四か村の念仏講衆で、明王院は天台宗延暦寺の別院であり、頼玄は明王院中興者として有名な僧である。その明王院主が念仏講衆の世話をしたことを語る遺物である。いうまでもなく天台系の念仏信仰の講衆である。

大阪府南河内郡河南町寛弘寺にある寛弘寺神山共同墓地は、この付近の古い墓地で、丘上中央に立つ立派な五輪塔は、この古い墓地の総供養塔である。正和四年（一三一五）に「六道講衆」によって造立されたことを、地輪に刻む。六道講は、六道にさ迷う衆生に廻向する仏事を修する講で、他にも例がある。

念仏衆や念仏講衆は多いが、大念仏衆とするのは珍しい。奈良県御所市富田の天満神社に現存する大きい五輪塔は、正和四年（一三一五）の造立で、「大念仏衆、奉造立之」とある。これは京都嵯峨清涼寺その他で中世以来行われたような大念仏の講衆を指すものであろう。

奈良市富雄中町の霊山寺本堂に寄進文所刻の板三枚があり、(注2) その一は文保元年（一三一七）に賢聖阿闍梨という僧が、霊山寺の六道講に現世安穏後生善処を得るために、田地を寄進しているのである。さらに元徳二年（一三三〇）にも、僧覚賢房が同寺六道講に田地を寄進し、正慶元年（一三三二）にも、僧行信阿闍梨が六道講のために田地を寄進しており、先に河南町の五輪塔で見た六道講が、この寺でも行われたことが知られる。

なお霊山寺では百座講というものも行われていた。これも寄進文板に見えるところで、嘉暦元年（一三二六）に家念房という者が、霊山寺百座講の布施物の費用にあてるために田地を寄進し、康永二年（一三四二）に犬次郎大夫という者が、二親の菩提のために百座講に田地を寄進している。霊山寺の本尊は薬師如来であるから、一日に百座を設けて薬師経を講ずる百座薬師講が行われたのであろう。

（注2）　土井実氏『奈良県銘文集成』（大和歴史館研究会）

福島県郡山市田村町御代田の甚日寺にある嘉暦二年（一三二七）の板碑は、法橋性公という僧のために「四十八日称名念仏結衆百人」が造立したのである。埼玉県熊谷市上之の泰蔵院の嘉暦三年（一三二八）の板碑にも「四十八日念仏結衆」とあり、約二十名の交名が刻まれている

が、孫二郎、四郎二郎、藤三郎といった風の名が多いのは、農村の中級の人たちらしい感じである。

先に大津市明王院の四村念仏講衆のことを記したが、同寺の嘉暦三年（一三二八）の宝塔基礎には「常住不動金剛頼玄、念仏講惣衆等敬白」とある。これも頼玄の世話によって造立された石塔で、四か村の念仏講を合わせるので、念仏講惣衆という書き方になっているのであろう。

岡山県新見市金谷の宝台寺五輪塔は、元徳二年（一三三〇）に「一結講衆等」によって造立された。一結衆とか講衆とかが普通であるが、一結講衆とするものも、鎌倉時代末頃から見かける。

京都府綴喜郡八幡町神応寺の谷の不動堂の銅製鰐口は、刻銘によるともと河内国茨田郡実城寺の阿弥陀如来宝前に懸けられたもので、元弘二年（一三三二）に寺僧と「鎮守講衆」が願主となって造立した。寺の鎮守を氏神とする人たちの講衆が寺に協力した例である。

大阪府北河内郡四条畷町逢坂の延元元年（一三三六）の五輪塔は、「大坂一結衆」の造立である。大坂は逢坂と同じで、この集落の人たちの結衆である。地名をつけた講衆の例は前にもあった。

奈良県桜井市高家（たかえ）の春日神社にある五輪塔の地輪には、暦応二年（一三三九）に「大施主十三人、陀羅尼衆」が造立したことを刻む。ダラニは梵語で、密教の真言である。密教系の信仰者十三人の結衆であろう。こういう変った名称の結衆も出てくる。神戸市兵庫区淡河（おうご）町神影（みかげ）の石峯寺五輪塔は、暦応四年（一三四一）の造立で、「光明真言一結衆等」の建てたものである。光明真言は、仏の光明を得て諸々の罪報を除き、極楽浄土に往生せしめるという功徳があるとする。先のダラニ衆と同様の結衆であるが、これは光明真言を通じての浄土信仰であることがはっきり示されている。

仏教的作善の参加者は、古くは上級の人たちのみであったが、段々と時代の下降するにつれて、仏教の一般庶民への滲透が進み、庶民もこれに参加できるようになる。南北朝時代の講衆の名を見ると、このような理解ができるのである。一つの例は福岡市水茶屋の路ばたに立つ自然石の板碑で、土地ではぬれ衣塚の伝説はあるが、その実体は康永三年（一三四四）に「接待講衆、合廿七人」が造立したもので、妙阿、弥五郎、又四郎、道善、藤九郎など二十七人の名が刻まれている。その名から見ると中級・下級の庶民らしく思われ、接待講というのは旅人や修行僧に湯水を接待するものである。こうしてかれらは功徳を積んだのである。

大分県速見郡山香町内河野の康永四年（一三四五）の板碑には、「別時講衆」の名が見える。これは毎日ではなくて、一定の期間を定めて念

仏を行うのが別時念仏で、在家の人たちは別時念仏が便利である。在家念仏信者のグループである。

大阪府高槻市原の神峯山寺入口に建つ宝篋印塔は、観応二年（一三五一）に「妙法禅寺の羅漢講衆」が造立したものである。五百羅漢を講讃する羅漢講というものが、仏教辞典には出ている。

兵庫県加古川市平荘町神木（こうぎ）の延文五年（一三六〇）造立の五輪塔に、「千部経結衆」と刻まれている。同じ経を千部読誦する講衆であるが、どの経を読んだのかわからない。同じ加古川市木村の北木村墓地にある宝篋印塔基礎には、応安五年（一三七二）に「百万遍一結講衆」によって造立された刻銘がある。これは念仏の百万遍講衆である。

兵庫県加古郡稲美町国安の地蔵山宝篋印塔は、明徳元年（一三九〇）に「毎月八日供養一結之講衆」によって造立されているが、八日は薬師如来の結縁日であるから、これは薬師講衆である。地蔵講や念仏講の多いのに比べると薬師講は少い。やはり極楽浄土信仰が優先しているのである。観音講も少い。岐阜県山県郡美山町八月の観音堂の鐘は、明徳二年（一三九一）に「当村十六人之観音講衆」によって造立された刻銘があり、その十六人の名がすべて出ている。永野大夫、堀端四郎、甘能太郎、井上太郎などの名は、村の上・中級の人々を思わせる。

南北朝時代の末になって、逆修のための結衆があらわれる。自己の死後の法事を生前に営むこの信仰は、この頃から江戸時代はじめにかけて盛行した。(注3) 兵庫県宝塚市西谷町波豆の宝篋印塔は、明徳二年（一三九一）に「逆修一結衆等」の造立したものである。鎌倉市浄明寺の浄妙寺宝篋印塔は、明徳三年（一三九二）に「預修一結講衆」の造立にかかる。逆修も預修も、あらかじめ修するで、その意は同じである。

（注3） 川勝「逆修信仰の史的研究」（大手前女子大学論集第六号）

兵庫県加西市北条町小谷地蔵堂内にある阿弥陀石棺仏は、南北朝に古墳の石棺材を利用して石仏を刻んだものであるが、「十人講衆等」とある。近世には百人講や萬人講などと人数をあらわす講名があるが、古いところで十人講といった表現は珍しい。この十人は阿弥陀如来の信仰グループであろう。

時代は室町時代にはいる。兵庫県豊岡市妙楽寺の福祥寺墓地に立つ地蔵板碑は、応永十八年（一四一一）に「二結衆等」によって造立されている。一結衆はいくらもあるが、二結衆というのは珍しい。読み誤りかと念を入れて見たが、どう見ても二結衆である。二組の結衆という意味に解さねばなるまい。

群馬県高崎市町屋の宝福寺宝塔は、永享十一年（一四三九）の造立で、「一郷五種行結衆、僧十三人、旦那十一人、同心敬白」とある。これは類のない珍しいもので、一郷の内で、僧侶が十三人、村の富裕層の旦那十一人が結衆して、極楽に往生するための五種の正行を行ったものである。浄土信仰の結衆である。

法華経と明示した講は古いところに出て来ない。兵庫県美嚢郡吉川（よかわ）町の毘沙門堂宝篋印塔が、永享十二年（一四四〇）に「法華一万部結衆」によって造立されているのは、珍しい例である。

以上の鎌倉時代から南北朝時代を経て、室町時代前期までの結衆や講衆の性格は、仏教信仰の正統に属するものがほとんどである。やがてそれらが庶民の日常生活と結びつくものとなる傾向が生じてくる。つまり民俗信仰的になる。信仰を表にして集会し、念仏をとなえたあと酒食をたのしむといったことになるのである。南北朝末期からその萌芽は見えるが、その特色が濃厚になるのは室町時代中期からである。以下にはそれを中心にして通覧してみよう。

四、民俗信仰的な講衆

まず六斎念仏の講衆があらわれる。六斎日と称して在家の者が毎月戒を保つべき特定の日を持ち、身をつつしんだ。これと念仏とが結びついた六斎日の念仏講である。大阪府岸和田市池尻町の久米田寺五大院に遺存する文安五年（一四四八）の石燈籠竿に「六斎衆等」と見えるのが古いが、これ以後近世に奈良県・大阪府中心に多くの例がある。

この他にも念仏講の形態は民俗的なものがいろいろできる。その一は夜念仏（よねぶつ）である。東京都練馬区上石神井（しゃくじい）二丁目三宝寺の弥陀三尊図像板碑は、文明四年（一四七二）に弥四郎、平太次郎、六郎四郎など五人の農村の庶民らしい名をつらね、「夜念仏供養逆修」としている。夜念仏は正式な仏教語ではなく、民俗信仰語である。この人たちは夜に集って念仏供養をしたもので、目的は逆修である。

東京都板橋区西台の円福寺の来迎弥陀図像板碑は、文明十七年（一四八三）に六人の農村の人たちによって造立され、「奉月待供養結衆」としている。十七夜や十九夜・二十三夜などに講衆が集って月の出を待って拝する信仰である。これも念仏をとなえて、結局は浄土信仰につながったことは、弥陀を本尊とし、光明遍照、十方世界、念仏衆生、摂取不捨の偈が刻まれていることから推察できる。

申待供養も室町時代中頃からあらわれる。庚申信仰の歴史は古いが、民俗資料的なものはこの時代からである。東京都練馬区春日町稲荷神社にあった長享二年（一四八八）の板碑は、豊玉二丁目一の故平野実氏宅に保管されていた。「奉申待供養結衆」として十四人の農村の人たちを中心とする交名がある。庚申の夜に寝ないで、念仏をとなえ、会食をしたりなどして夜を明かす民俗信仰である。この板碑の梵字は「マン」であるから、私はこの場合は文殊菩薩を本尊としたものと理解している。それが常識だと思っているが、これに対して板碑研究の大先達たる三輪善之助氏は不動明王の種字であるとして反駁された因縁がある。(注4)

（注4）　平野実氏『庚申信仰』（角川書店）

京都市南区の東寺に所蔵する木造の桝（ます）に永正十六年（一五一九）に作られたものがあり、「東寺稲荷御出講」としてある。伏見稲荷の神が東寺の古い鎮守神であったので、東寺の東側に稲荷のお旅所が今日も存続してある。御出（おいで）というのは神幸祭のことで、稲荷の神がお旅所に神幸される時に奉仕するのが御出講で、その時に米を計った桝と思われる。こういう特殊な講もある。

念仏講の別の形態に居念仏（いねぶつ）というのも出てくる。奈良県生駒市萩原の応願寺にある天文十六年（一五四七）の名号板碑には、「念仏人数二十六人、居念仏人数四十七人」とある。人数は講衆または結衆と同じ意味で、念仏講衆と居念仏講衆である。居念仏の方がはるかに人数が多い。この念仏と居念仏とはどうちがうのであろうか。強いていえば、念仏講の方は、行道（めぐり歩くこと）しながら念仏するに対し、居念仏は坐ったまま念仏するのではないかと思う。

こういうように今日わからなくなったものに斎講（ときこう）がある。京都府相楽郡加茂町辻墓地の弘治三年（一五五七）の名号板碑に「斎講」とあり、永禄三年（一五六〇）の同所の名号板碑には「春斎講一結衆」とある。持戒に関係のある言葉であろうが、民俗信仰的な斎講が何を行ったのかは不明である。春斎講のあるのは、春秋の彼岸会にも結びつくのかも知れない。

桃山時代も終り近い慶長十五年（一六一〇）の、大阪府守口市大庭町二丁目正覚寺の十三仏板碑には「逆修中」という言葉がある。これは逆修結衆の意味で、グループを中（じゅう）という文字であらわす。この頃から江戸時代にかけて従来の講衆を講中、結衆を結衆中と書くような例が増して来る。きわめて近世的な書き方といえる。

和歌山県伊都郡九度山町の慈尊院の板碑群の中に、「不食講結衆中」が明暦二年（一六五六）に造立したものがある。この不食講もどのよう

な性質の講かわかっていない。(注5)

(注5) 奥村隆彦氏「不食供養の研究」(史迹と美術四三七・八・九号)

兵庫県宝塚市米谷(まいたに)の長谷川家にある天和二年(一六八二)の石燈籠には、「十七日講之人数」とあるが、十七日を結縁日とするのは竜樹菩薩で一般向きではない。この場合十七日は任意の日なのであろう。

庚申塔の造立者には、「当町男女諸衆」や、町内の名をつけた「乱橋町講中」などもあるが、鎌倉市材木座四丁目五所神社境内に集められたものの中に、貞享四年(一六八七)に、「庚申中間」の建立したものがある。講といわず「中間(なかま)」としているのが庶民的である。

東大阪市御厨(みくりや)の享保六年(一七二一)の地蔵石仏は、「御厨村融通念仏講」と「地蔵講一会中」によって造立されている。融通念仏は河内・大和方面に近世盛行したもので、在家の念仏信者たちが自他の念仏は融通するとした信仰で、大阪平野の大念仏寺を本山として、大念仏宗を称するものである。

萬人講や百人講の名は近世的である。その内容も従来の講衆が多人数であっても特定の人たちを対象としているのに対し、萬人講や百人講は不特定多数の人たちを集め、零細な寄附を積み上げて、寺の造営などに参加させる目的が感じられる。

東日本には十九夜信仰の近世石塔が多い。例えば福島県郡山市安積町日出(ひじ)の山の子安観音像は、江戸時代末の文久二年(一八六二)の造立で、台座に「十九夜、女人講中」と刻まれている。十九夜は月待の日の一つであるが、女性ばかりの講衆の作善であることは注目される。この他、江戸時代の庚申塔でも女性ばかりによる造立が目立つ。桃山時代以前になかったことである。近世の女性の地位向上が、こうした信仰の面でも見られるのである。

五、結　　語

講衆に関する研究とはいうものの、材料を年代順に羅列して解説するに近いものになってしまった。しかし歴史的に講衆のことをたどるには、基本的にこれが必要である。従来この程度の整理もできていなかったのである。資料の不足、脱漏などいろいろ出てくるにちがいないが、多くの方々の教示によって補足し前進させるために、この小文は捨て石となることを念じるものである。

中世の仏教的作善を行った多くの上級階層の個人と並行して、多数者から成る講、結衆、講衆が活動した事実が上述のように少からずあった。そこには厳粛な仏教信仰があり、かれらの造立した遺品を今日見る私どもの胸を打つものが多い。室町時代に入る頃から、民俗信仰色が濃厚になると、人々の日常生活に親しみやすい信仰形態、あるいは信仰を通じての娯楽というような面も出てくる。それゆえにこそ人々は民俗信仰と手をつないで行ったのにちがいない。そこに歴史的な変遷があった。

もっと講や講衆の動きの具体的なことがわかると興味も深いのであるが、ともかく今はこの程度にとどめる他なかった。

終りに、これらの資料を集めるために多年にわたって、各地の多数の方々から受けた学恩に対して心から感謝の意を表する。

なお「講衆関係名称一覧表」を添えて参考に供した。どの名称がいつごろから使われているかといったことの検討に利用されると同時に、新資料によって補訂をして頂くことを希望する。

（昭和四八年八月）

講衆関係名称一覧表

西紀	名称	所在
一二二二	百日講	奈良市元興寺極楽坊本堂柱（貞応元年）
一二四四	往生講衆	同　（寛元二年）
一二七一	毎月廿四日結衆	埼玉県騎西町竜興寺板碑（文永八年）
〃	結衆	群馬県赤岩光恩寺板碑（文永八年）
一二七六	一結衆	同　桐生市東今泉曹源寺板碑（建治二年）
〃	地蔵講衆	京都市上京区堀川寺之内上る興聖寺地蔵像（建治二年）
一二八〇	一結諸衆	和歌山県高野山金剛峯寺鐘（弘安三年）
一二八三	毎月十四日念仏結衆	兵庫県加西市吸谷慈眼寺層塔（弘安六年）

一二八六	毎月十五日一結衆	埼玉県小川町敏満寺墓地板碑（弘安九年）
一二九二	宮河講衆	京都府亀岡市金輪寺層塔（正応五年）
一二九五	地蔵講結縁衆	神奈川県箱根町五輪塔（永仁三年）
一二九八	六八願衆	奈良県桜井市談山神社（永仁六年）
一二九九	一結念仏衆	同　御所市勝福寺地輪（永仁七年）
一三〇四	当寺講衆	大阪府守口市来迎寺十三重塔（嘉元二年）
一三〇九	十八日講衆	旧常陸国蓮光寺鐘（延慶二年）
一三一一	四十八日念仏結衆	山形県上山市前丸森板碑（応長元年）
一三一二	念仏講衆	三重県阿山町来迎寺宝塔（応長二年）
一三一四	念仏衆	埼玉県吉見町新井家板碑（正和三年）
一三一五	六道講衆	大阪府河南町寛弘寺神山共同墓地五輪塔（正和四年）
〃	大念仏衆	奈良県御所市富田天満神社五輪塔（正和四年）
一三二六	百座講	奈良市霊山寺寄進板（嘉暦元年）
一三二七	四十八日称名念仏結衆	福島県郡山市甚日寺板碑（嘉暦二年）
一三二八	念仏講惣衆	滋賀県大津市明王院宝塔（嘉暦三年）
一三三〇	一結講衆	岡山県新見市宝台寺五輪塔（元徳二年）
一三三二	鎮守講衆	京都府八幡町神応寺谷の不動堂鰐口（元弘二年）
一三三六	大坂一結衆	大阪府四条畷町逢坂五輪塔（延元元年）
一三三九	陀羅尼衆	奈良県桜井市高家春日神社地輪（暦応二年）
一三四一	光明真言一結衆	神戸市兵庫区石峯寺五輪塔（暦応四年）

一三四二	念仏一結衆	同　垂水区布施畑五輪塔（暦応五年）
一三四四	接待講衆	福岡市ぬれ衣塚板碑（康永三年）
一三四五	別時講衆	大分県中山香内河野板碑（康永四年）
一三五一	羅漢講衆	大阪府高槻市神峯山寺宝篋印塔（観応二年）
一三六〇	千部経結衆	兵庫県加古川市神木五輪塔（延文五年）
一三六五	四十八日念仏無縁衆	同　姫路市兼田地蔵石仏（貞治四年）
一三六六	博多講衆	広島県宮島町厳島神社銅釣燈籠（正平二十一年）
一三七二	百万遍一結講衆	兵庫県加古川市北木村墓地基礎（応安五年）
一三七三	地蔵講結衆	静岡県藤枝市鬼岩寺五輪塔（応安六年）
一三九〇	毎月八日供養一結之講衆	兵庫県稲美町地蔵山宝篋印塔（明徳元年）
一三九一	観音講衆	岐阜県美山町八月観音堂鐘（明徳二年）
〃	逆修一結衆	兵庫県宝塚市波豆宝篋印塔（明徳二年）
一三九二	預修一結講衆	神奈川県鎌倉市浄妙寺宝篋印塔（明徳三年）
（無紀年）	十人講衆	兵庫県加西市小谷地蔵堂石棺仏（南北朝時代）
一三九九	逆修心信結衆	東京都中野区清谷寺十三仏板碑（応永六年）
一四一一	二結衆	兵庫県豊岡市福祥寺板碑（応永十八年）
一四二四	預修結衆	高知県越知町横倉神社鐘（応永三十一年）
一四三四	百万遍人講	滋賀県守山市守善寺宝篋印塔（永享六年）
一四三九	一郷五種行結衆	群馬県高崎市宝福寺宝塔（永享十一年）
一四四〇	法華一万部結衆	兵庫県吉川町毘沙門堂宝篋印塔（永享十二年）

一四四四	薬師講衆	京都市右京区化野念仏寺五輪塔（文安元年）
一四四六	地蔵講一結衆	東京都八王子市片倉城跡板碑（文安三年）
一四四八	六斎衆	大阪府岸和田市久米田寺石燈籠竿（文安五年）
一四七二	夜念仏供養	東京都練馬区三宝寺板碑（文明四年）
一四八三	月待供養結衆	同　板橋区円福寺板碑（文明十七年）
一四八八	申待供養結衆	同　練馬区旧春日神社板碑（長享二年）
一四九〇	念仏講結衆	奈良県生駒市長楽寺五輪塔（延徳二年）
一四九四	法華講衆	京都府木津町木津旧墓地地蔵石仏（明応三年）
一五一九	東寺稲荷御出講	京都市南区東寺木造枡（永正十六年）
一五四七	念仏人数	奈良県生駒市応願寺板碑（天文十六年）
〃	居念仏人数	同
一五四八	結縁念仏衆	兵庫県加古川市願成寺鐘（天文十七年）
一五五六	六斎夜念仏人衆	奈良県生駒市宝幢寺板碑（弘治二年）
一五五七	斎講	京都府加茂町辻墓地板碑（弘治三年）
〃	大念仏講衆	奈良県斑鳩町極楽寺墓地板碑（弘治三年）
一五五八	六済夜念仏人数	奈良県生駒市石仏寺板碑（永禄元年）
一五六〇	春斎講一結衆	京都府加茂町辻墓地板碑（永禄三年）
一五六五	六済念仏之衆	奈良県吉野山勝手社旧鐘（永禄八年）
一五六七	六斎人数	同　生駒市鶴林寺板碑（永禄十年）
一五七〇	春日講	同　山辺郡勝原集落御鉢箱（元亀元年）

一五七五	六斎念仏供養人衆	同　生駒郡榊原墓地地蔵石仏（天正三年）
一五七六	六斎一結講衆	大阪府貝塚市孝恩寺二重宝篋印塔（天正四年）
一五九八	称名百萬結衆	京都府木津町安福寺板碑（慶長三年）
一六一〇	逆修中	大阪府守口市正覚寺十三仏板碑（慶長十五年）
一六五六	不食講結衆中	和歌山県九度山町慈尊院板碑（明暦二年）
一六七二	庚申講衆	東京都墨田区永井家庚申石燈籠（寛文十二年）
〃	庚申講中	神奈川県鎌倉市五所神社庚申塔（寛文十二年）
一六七八	当村男女結衆	栃木県足利市善徳寺霊園庚申塔（延宝六年）
一六八二	十七日講之人数	兵庫県宝塚市長谷川家石燈籠（天和二年）
一六八三	庚申供養講中	東京都八王寺市宝生寺庚申塔（天和三年）
一六八四	乱橋町講中	神奈川県鎌倉市五所神社庚申塔（天和四年）
一六八五	夜念仏衆中	大阪府東大阪市摂取庵鰐口（貞享二年）
一六八七	庚申中間	神奈川県鎌倉市五所神社庚申塔（貞享四年）
一七一八	地蔵堂講中	和歌山県下津町地蔵峰寺銅釣燈籠（享保三年）
一七二一	融通念仏講	大阪府東大阪市御厨地蔵石仏（享保六年）
〃	地蔵講一会中	同
一七二七	地蔵念仏講中	同　東大阪市摂取庵鉦（享保十二年）
一七四二	萬人講	愛知県甚目寺町甚目寺宝篋印塔（寛保二年）
〃	観音講	同
一七四五	百人講衆	奈良県榛原町西方寺庚申塔（延享二年）

一七五九	庚申待講	東京都葛飾区普賢寺庚申塔（宝暦九年）
一八二七	念仏講中	兵庫県加西市春岡寺徳本上人石像（文政十年）
一八五〇	女人中	栃木県小山市天満宮十九夜塔（嘉永三年）
一八六二	女人講中	福島県郡山市日出の山子安観音石像（文久二年）
（無紀年）	百萬遍講中	滋賀県甲南町勢田寺鉦（江戸時代）